



19世紀末から20世紀初頭アメリカの女子体育とジェンダー : AMERICAN PHYSICAL EDUCATION REVIEW(1896-1929)より

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊安, 貴美江 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005016

19世紀末から20世紀初頭アメリカの 女子体育とジェンダー

— AMERICAN PHYSICAL EDUCATION

REVIEW (1896—1929) より —

熊 安 貴 美 江

Abstract

The purpose of this study was to investigate the relation of physical education for girls and women and gender in America from late 19th century to early 20th century. For this purpose, the articles of American Physical Education Review (1896—1929) were mainly used as historical materials, and the beliefs of physical educators concerning women's body, mentality, exercise, sports and education were examined.

The results of the investigation were as follows:

The physical educators at that time served partially to make a new image of women by encouraging them to have vigorous out-of-door exercises. They emphasized mental qualities of initiation, self-confidence and cooperation which were different from the required qualities of Victorian ideal women.

But on the other hand, by putting severe restriction on high level athletics of women, the physical educators (especially women physical educators) underestimated women's abilities in athletic sports and emphasized the fixed idea on the gender concerned with athletic sports.

<はじめに>

19世紀半ばにアメリカ初の女子大学が門戸を開き、以来男性と同等の大学教育が女性にも提供されるようになった。高等教育は女性の健康を害すると信じられていたので、女子体育の当初の目的は、勉学の結果生じる不健康を癒すことにあった。やがて女子大学によって女性が十分に勉学に耐えられることが証明されると、次に疾病予防の手段として女子体育は認識されるようになったが、19世紀末になってもその主なプログラムは依然として種々の体操やキャリセニクス（女性の生理学に基づいた一連の美容・柔軟体操）であった。そして身体的健康に加えて精神的価値や社会性の重要性が体育を通して認識されるにつれて、その教育手段としてゲームやスポーツ競技が導入され、世紀末を境にしだいにそれらが体育の重要なカリキュラムとして定着していった。しかし女子体育においては、特にハイレベルの競技は除外され、当初から女性体育家を中心としてその方向はきっちりと管理、統制されていた。(Ainsworth²⁾ pp.1-23)

一方、アメリカスポーツ史における19世紀末の30年間は、その間の男性のスポーツ状況を「組織化の時代」とみなしており、すでに競技スポーツを中心とする種々の種目がこの時期にクラブを中心として一般化され、その連合組織を生み出していたが、女性の近代スポーツへの参加は、南北戦争後になって初めて、上流階級の女性によってスタートしたばかりであった。1877年に女性のためのアスレティッククラブが初めて出現したが、この種のクラブは「女性専用というよりも、男性の側からの特別な配慮を前提として、男性と一緒に女性のペースでスポーツを楽しもうとする、新たな社交の場」というべきものだった。男性のスポーツへの熱狂は20世紀に入ってさらに高まり、1920年代には、「スポーツの黄金時代」を迎える。すでに多種目のチャンピオンシップスポーツに向けて国民的感情が醸成されつつあったこの時期は、野球やフットボールやその他の種々の競技において男性スタープレイヤーを輩出した。女性のスポーツ参加も徐々に広がり、この時期にはテニスやゴルフ、水泳といった女性にふさわしいとみなされたいくつかの個人種目において数人のスタープレイヤーを生み出した。(小田切²²⁾ pp.143-229)

以来、女性のスポーツ参加は、ヴィクトリア的女性像からの脱却と新たな女性像の模索という方向において女性解放の一端を担ったが、しかし女性が参加するスポーツの種類や程度には制限があり、スポーツへの関わり方そのものが、当初から「好ましい女性像」といった観念と密接に結び付き、ジェンダーアイデンティティの形成に影響を与えてきた。

以上のような世紀末から20世紀初頭のアメリカの体育・スポーツ状況は、今日的な女性の体育・スポーツ状況の歴史的出発点として重要な時期である。今日、女性の競技スポーツは、競技の高度化や参加種目の拡大をめぐる従来とのジェンダー関係を変容させようとしているし、そのカリキュラムの大部分をスポーツで構成し、身体そのものを教育の目的や手段としている体育も、男と女の性差を論じながら、身体文化を通してジェンダーを定義する役割を果たしてきた。

Whitson は、ジェンダーアイデンティティの形成にとっての身体とスポーツの重要性について述べ、スポーツが男女の規定された関係を再生産し、変質させる機能を持つことを指摘している。(Whitson³⁵⁾)

女性の体育の発展に関するこれまでの歴史的記述の多くは、体育・スポーツにおける女性の歴史を矯正してきたが、この時期の体育家たちが男女のジェンダーを体育理論の中でいかに位置づけていたかという点について、あまり関心を払ってこなかったように思われる。従ってこの小論では、1896年から1929年に刊行された米国初の体育家の専門誌、American Physical Education Review (1896-1929)^{註1)} (以下、A.P.E.R.とする)を主要な一次史料として用い、体育家たちが身体や精神、あるいは運動やスポーツ、教育とジェンダーとをいかにして関係づけ、その関係を変容させ、女子体育の動向に影響を与えたのかということについて検討したい。

<19世紀からの女子教育と体育の関わり>

19世紀前半、女性にもよりよい教育の機会を求める能力と必要性和権利があることを提唱した先駆者によって、多くの中等教育施設がつけられた。音楽や刺繍といった、皮相的、装飾的な芸能方面への配慮しかなく、こなかった従来の女子教育を批判し、女性にもしっかりとした学問教育を施

そうとした彼らの主張はしかし、けして一般的賛同を得たわけではなかった。その理由は、女性が知的能力において劣るという先入観と、中等教育が女性の健康に害を及ぼすという見解であった。

女子教育の先駆者として名高い Emma Willard や Catherine Beecher、Mary Lyon らは、学問教育と同時に女性の体育も重視し、それぞれダンスやキャリセニクス、家事 (domestic duties) という異なるタイプの運動を女子生徒に課した。しかし彼女らの主張は、女性の人生を男性とは異なる領域に置くことを前提として、それにふさわしい教育を施そうというものであり、女性に開かれた唯一のプロフェッションである教職を強調するほかは、家庭においてよく役立つ、美しい婦人を育成することに重きを置いていた。Beecher の教育の基本理念も、新たな女性像の追求といったところにはなく、従来女性の生き方や役割を肯定した上で、それまで軽視されてきた女性の身体運動や健康の問題に着目したという点にとどまっている。(大柴²¹⁾、小田切²²⁾ p.224)

この3人とは異なる体育を試みた W.B.Fowle は、1825年にドイツから少年のために輸入した体操を、少女にも適用しようとした。それは棒にぶら下がったり、揺らしたり、いくつかの腕の運動を含むものであったが、その中から少女にとって適切な運動を選択することに彼は困難を感じていた。「女性が繊細で礼儀正しいものであるという一般的先入観のために、女性を弱々しく頼りない存在でなくそうとする試みは、ことごとく矛盾に直面してしまう…。」(Ainsworth²⁾ p.5, Twin³⁾ p.197)

19世紀前半の、女性が病弱さによって自らの女らしさを証明するといった不健康崇拜によって、Fowle の女子体育に対するパイオニア的試みは失敗に終わっている。

19世紀後半には、女性のための中等教育はより一般的に承認されるようになったが、ヴィクトリア的理想を求める女性は、女性の領域の限界を受け入れるように教育された。この理想の女性は、家庭的な美徳を養うことに満足するように、身体的な活動範囲を制限することを教えられ、身体運動そのものも、レディらしいふるまいという因襲によって束縛された。少女の兄弟が屋外で冒険を楽しむ一方で、彼女はめったに冒険などしなかつ

た。兄弟たちは木に登ったり、走ったり、つかみ合いをするが、彼女にはそうすることは許されなかった。(Burstyn⁶⁾)

20世紀に入っても少女たちを取り巻く一般的環境はそう大きくは変わらなかった。20世紀の体育家たちは、10～15才くらいの少女期の身体運動の重要性をあらためて提唱するようになった。アマースト大学の教授 J.M. Tyler は、高校に入りたての少女の身体とその不健康さが脳に及ぼす影響について、次のようにとらえていた。「身長は急速に伸びているのに、胴回りは平均以下だ。肺活量は小さく、消化力は弱い。彼女らは便秘と頭痛に悩み、貧血症で青白く、その顔色は土色で目は重い。」血流の少なさは脳の動きを止め、そのために「聡明な少女でさえ、この時期には一時的に愚かになる。」(Tyler³³) そして高校入学時の少女の不健康さの原因を、彼は両性の社会化される方向の違いに基づいてとらえた。この時期まで少女と一緒に野球をしていた兄弟たちは少年野球チームに加わり、よりスポーツと結び付いていく一方で、彼女らはやがて屋外での遊びをやめて、最も運動を必要とする時期に不活発になっていく。「もし少女が、走ったり飛び跳ねたりふざけ回ったりすることはレディではなくおてんば娘のすることだと言って、母親や先生や友人からとがめられなければ、彼女は好運である。」(Tyler³²)

女性に大学教育が提供され始めたのは19世紀後半に入ってからであるが、この時期の女子体育に大きな影響を与えたのはハーバード大学の医学博士、E.H.Clark であった。女性にとって男性と同等の知的努力は不可能であり、もし女性が脳を酷使すれば、解剖学的、生理学的に深刻な病気を引き起こすであろうという医学的見解に基づき、彼は1873年に「教育における性」を著して、女性の高等教育を批判した。この小冊子は、女性が生理のために定期的に無能力になるために高度な知的達成ができないのだというこの時代の議論に、基準となる考えを提供するものだった。Clark のこの見解は、女子教育の推進者からの多くの批判を引き起こしたが、結果的には女性の病弱さを保護するための努力を彼らから引き出すことになり、女子大学や共学の大学は、女子学生の身体の健康を確保するために、体育の部門を設けるようになったのである。Clark の見解に反して、大学を卒業した

女性は体力や機敏さにおいて優秀であり、知的努力によって健康を害することもないことを証明した。1890年代初期までには、勉学によって大学の女性は大学外の女性たちより健康になり、女子体育は広がった。(Park²⁰⁾ pp.36-38, Twin³¹⁾ p.201)

<女子体育の目的の変化>

19世紀後半の50年間で、女性が従来考えられていたほど虚弱な生き物でないことが明らかにされ、不健康が勉学の結果生ずるものではないということも証明されるようになると、それに伴って、学校で体育という教科を存続していく理由も変化してきた。20世紀に入ると体育は、身体的弊害を矯正したり、それに機先を制する予防の手段としての段階を越えて、社会的資質の育成という新しい目的に応えるべき教科として、体育家の間で認識され始めた。それまで女性の身体は、それに何かを教え込むというよりはむしろ、単に美や母性に対する手段として、健康を維持するために必要とされたが、20世紀初頭の体育におけるこの新しい目的は、女性の身体性に新たな意味を付与するのに役立った。

「体育が個人や社会におけるモラルをいかにして育成しうるか」(Tyler³³⁾) といった精神的向上に関する課題は、20世紀初頭の体育家の主要な関心のひとつとなった。1911年、オーガスタの体育教師である H.Dawnie は、15才以下の少女の精神的特性に注目して、体育が社会的、道徳的、精神的教育として負うていくべき課題を述べている。彼女によるとこの年頃の少女は、何気なく過ごしている時期から自発的な生活へと移行する時期になると特に、「恥ずかしがりで臆病で自発性に欠けて」いた。彼女らは、ある行動において何を成し遂げようとするのか、あるいはいかにしてそれを成し遂げようとするのかといったことについて精神的なイメージをはっきりと持たず、自分の内に発達し始めている力をうまく発揮することができなかった。恐れやはにかみ、自信のなさや「おとなしく、レディらしく、自己抑圧的にしなさい」という両親や年長者の影響」が、少女たちの行動の表現を妨げたのである。このように行動によって表現できないことが少女の神経組織に影響を与えて、彼女らを内観的で落ち着かなく不幸せな存在に

しているのだと Dawnie は考えた。そして生物学的・心理学的遺伝もさることながら、それに加えて環境が性格を陶冶する影響の大きさを彼女は指摘し、少年が自らの衝動を行動に移して表現するように奨励される一方で、少女にはそのような環境が用意されていないことを嘆いた。そこで体育にそれまで要求されていた身体的健康という生物学的目的に加えて、高潔な振舞いと性格形成のための、明確でしっかりした方法を体育において確立すべきであると彼女は考えたのである。それは、それまで外見や干渉的な考えに支配され、ロマンスや理想主義で一杯になっていた少女たちの視野を「現実の生活」に向けさせ、諸問題に立ち向かい解決する能力をこれからの女性に求めていこうとする、新たな女性観に基づくものだった。「我々の目下の課題は、若い女性が人生の緊張に見舞われた時に、彼女の兄弟が期待されるのと同じように正直に公正に正々堂々と、強いられた困難に耐え、対処できるように、彼女らが若い内にいかに教育するかということである。」(Downie¹⁰⁾)

このような女子体育の目標への展望は、戸外での生き生きとした活動を少女たちに奨励することによって、ヴィクトリア的な女性観——健康的な活動はレディらしくないといった過去のばかばかしい伝統——からの解放の第一歩となった。「コルセットや重いスカート、高い襟やきつい首のバンドなどの衣服の束縛からのがれよう！ ハイヒールや先細のトゥ・シューズからさらに解放されなければ！」——1921年、女性体育家の L. C. Drew は、長い間女性に与えられてきた「より弱い性」という汚名を返上し、「身体的・精神的な力強さや弱さといった特徴を、両方の性に当てはまるものと考え、互いの性を定義づける属性としてはみなすまい」と書いている。(Drew¹¹⁾) 第一次世界大戦の間、男性の出兵によって穴のあいた重要な産業職の多くを女性が引き受けたという事実は、女性が予想以上に有能であることを証明したと体育家たちは考え、従来通りの母親としての役割だけでなく、市民や労働者としての女性の役割と体育を結び付けて考えるようになったのである。

1920年代後半に入ると、女子体育の課題は、当初の身体的目的よりもむしろ、精神的目的や余暇善用のためにゲームやスポーツの技術を獲得する

という社会的目的を強調して語られるようになった。このことは、20世紀初頭の新しい体育論が、プラグマティズムに基づいた新教育論と密接に関わっていたことにより、説明される。つまり、それまでの体づくり（身体の教育）偏重の体育を反省し、心的態度や性格や人格といった側面を考慮し、社会的教育を重視していこうとする新体育の思潮にとって、ゲームやスポーツの導入は有用なものと考えられたのである。機械化によって産業や経済が変化し、生活の変化に伴って生まれた余暇を前に、子供も大人もそれを善用するすべを持っていないことを観察していた体育家L.H.Gulickは、すでに1909年に「子供たちと、将来の市民たる人たちの社会生活を、学校が考慮しなければならない時代になった」ことを指摘していた。彼は身体活動は健全な筋肉の運動をもたらすだけでなく、同時に「有用な社会生活と社会活動をもたらしてくれる」(Gulick¹⁵)と考えていたが、それが学校体育の目標として具体的に意識されるまでには時間がかかったのである。やがて体育の課題は教育の一般的課題と対応するものでなければならぬと、体育家たちは考え始めた。たとえば、アイオワ州立大学のE. Halseyは1925年、大学の女子体育の目的とカリキュラムを、教育の一般目的と対応させて次のようにとらえている： ①健康 —— 健康 ②市民的行動、倫理訓練、余暇活動 —— スポーツマンらしくふるまう習慣、つまりゲームの愛好、種々の身体活動の技能、生活におけるスポーツマンらしい態度 ③親となる訓練 —— 親となる訓練（前者が一般的教育課題、後者がそれに対応する体育課題）(Halsey¹⁶)。②の目的は、その後、性格形成や良き市民性の育成につながる道徳的社会的習慣を身につけるために、「リーダーシップやフォロワーシップ、フェローシップの能力を育てる」という具体的目標へと広がった。(Hartley¹⁷) ゲームやスポーツの本質がこのような目的にとって限りない機会を与えてくれると体育家たちは考え、女子体育において最も強調される場所となったのである。③の具体的内容は、月経困難の治療的運動、月経時の保護、男子向きのゲームの排除といったもので、女性の生理機能は激しい運動に適さないという信念に基づいて、激しい競技や大学対抗競技などのハイレベルな競技会を避けることを明言している。この考えは、当時の女性体育家を中心として展開された一連の女

子競技の高度化に反対する主張の一部であった。(後述)

<スポーツと「男らしさ」>

ところで、1900年前後の女性と体育・スポーツの関わりを考える際、この時期までにすでにスポーツと「男らしさ」という価値観が密接に結び付いていたということは、重要な事実である。スポーツが「男らしさ」の社会構造においていかなる位置を占めてきたかという問題について、最近いくつかの研究がこの問いに答えようとしている。

19世紀後半のイギリス社会で「男らしさ」の規範が強く求められたことを、シアードとダニングはラグビーの出現と関連づけてこう説明している。「ますます普及しつつあった工業都市的条件のもとでは、上流・中流の男らしさの規範が、日常生活の通常の流れの中で表現されることが難しくなっており、かなりのあつれきがなかったわけではないが、それらの規範が合法的に表現されうる主要な社会的エンクレーブの一つとしてラグビーは出現した。」(シアード・ダニング²⁹⁾)

同様な分析が、19世紀後半アメリカについてもなされている。19世紀後半アメリカで「男らしさ」が求められた理由について、Twin はやはり産業化による生活の変化が「男らしさ」の喪失という危機感をもたらしたことを、その原因としている。つまり、産業化によって工場が農場に、都市が街に、時計が太陽に取って代わり、座りがちな都会の仕事は初期のフロンティアのダイナミックさを忘れさせ、めめしさと同義に解釈されるようになった。そうして喪失した「男らしさ」を取り戻すために、スポーツが機能したのだと。「アメリカ人は、スポーツが男らしい本能を取り戻させると信じていた。」(Twin³⁰⁾ pp.198-200)

Park は1890年代の「男らしさ」の希求へのもう一つの原因を、世界のナンバーワンの国 — 知的・道徳的にはともかく、身体的・技術的に他のどの国よりも優れている — としての自負、ナショナリズムに基づくものとしている。「スポーツ — 男のスポーツ — は、アメリカの優越性を確立するためのひとつの努力として頻繁に用いられた。」1890年代のアメリカ文化を方向づけた一つの大きな特徴は、若さ・男らしさ・大胆

さへの衝動であり、それが競技スポーツへの熱狂と結びついたのである。たとえば1890年にはすでに、男性の大学対抗競技が定着し、フットボールや野球、陸上、漕艇に人気が集まっていたが、全てのスポーツの中でフットボールが最も勇ましく、人気があった。「それは最高の『アメリカの男らしさ』についてのあらゆる資質を例証するゲームとして売り込まれた。」(Park²⁸⁾ pp.1-15)

また、1880年に先立つ近代スポーツの起源と意味を理解するために、Crosset は、19世紀の「男らしさ」の奨励を、初期の近代スポーツを組織化し成長させるための触媒としてとらえた。そして19世紀のセクシュアリティに関する議論を近代スポーツの興隆と関係づけ、それらが男性のスポーツ活動を正当化する考えの中にどのように定着していったのかを調べ、青年教育の一部として競技スポーツが重要視されていたことを指摘している。(Crosset⁹⁾) これを例証するものとして、たとえば Adelman は、1867年のスポーツジャーナルが、男らしさの育成という特有の表現で少年の野球を正当化し、「それ(野球)は勇気、度胸、決意、忍耐といった男らしい態度を育成する場を提供してくれる。」と書いている。(Adelman¹⁾)

これらの、「男らしさ」とスポーツの関係についての考察が示唆する重要な点は、すでに19世紀後半には、中流のアメリカ人にとって、「男であること」(maleness)と「男らしさ」(manliness)が、ある種の身体的形態と活力ある動き、とりわけ競技スポーツと屋外の運動によって定義づけられたことである。そして「男であること」が重要なこととしてとらえられたので、それがまた翻って、女らしさが定義づけられ判断される際のバックグラウンドを提供した。たとえば、1874年に Mary Outerbridge によってアメリカに伝えられたテニスは、当初は女性向きのスポーツとみなされていた。教育機関の外では上流階級の社交上のたしなみとして女性のスポーツが行われ始めたが、クロッケーやテニスやゴルフはその代表的なものであった。それらはゲーム自体がそれほど活動的なものではなく、ロングスカートを地面に引きずりながらも参加できる優雅なものであったがゆえに、女性がたしなむスポーツとして早くから社会的に受容されたのであった。テニスにいたってはコートの中を動かなくてもすむよう、ワンサイド

に3～4人もパートナーがおり、「ボールの後を追いかけて走り回るなどという行いは女らしくない」(Lucas and Smith¹⁹⁾ p.256) こととされていた。狩猟好きのスポーツマンとして知られる第26代大統領 T.Roosevelt (1901～9 就任) は、「テニスの服装で撮った自分の写真を絶対に公表させなかったし、また友人のウィリアム H.タフトに、ゴルフなどをやって、せっかく目前にある大統領の椅子を棒に振るなど忠告したのだった。」(モリソン²⁰⁾)

女子体育の指導者は、従来の社会的偏見や慣行に立ち向かい、活動的な身体運動と女性とを結び付けることには前向きであったが、その一方で、男性のスポーツを緩和した女性向きのスポーツを提唱することによって、スポーツ競技の種類と程度において男女のジェンダーを明確に区別しようとした。女性の身体活動の制限に対する社会的認識は徐々に緩められつつはあったが、19世紀からの支配的な解釈は劇的に変わったわけではなく、20世紀に入ってもなお多くの人々は、競技が女性をたくましく男っぽく独断的にさせると信じていた。そしてそれは、女性の姿かたちの美しいラインやカーブをこわし、長い間女性の性を特徴づけてきた魅力やとらえどころのない雰囲気といったものを奪い取ってしまうと考えられていた。ハーバード大学の D.A.Sargent は、1912年、従来よりはいく分新しい女性の身体学への解釈を示しながらも、人間の身体について社会的に根深く構築された概念から逃れることはできなかった。彼によると、女性も基本的には男性と同じ構造なのであるから、生理学的には女性にも男性と同じ運動が必要なのだという。それゆえ女性が加わってはいけない競技スポーツやゲームはないし、女性もスポーツでの成功を期待してよいのだ、と。しかしながら、男っぽく荒々しいスポーツで秀でる女性は何かしら男性的な身体的特徴を受け継いでいるか獲得しているのであり、そういう男っぽさをもった女性だけが、男性のスポーツにおいて卓越することができるのだと彼は考えていた。そしてこのような女性は身体的に男のような特徴を帯びる「危険」があるので、女性のスポーツは男性のものを緩和したものにするべきであると結論づけている。今日的な男性と女性の性差は、高度に文明化した種族の間にのみ特有な特徴なのであり、両性の類似は人類発展の

初期の段階における特徴だと考えていたので、彼は女性の身体が男性に類似することを望ましく思わなかった。男女共学や、仕事やある種のレクリエーションへの参加によって、女性の理想や習慣は男性のそれと似通ってきたが、このような男女の接近は人類発展におけるこの20世紀の進歩的段階にはそぐわないものであろうと彼は考えていた。(Sargent²⁶⁾)

1912年、Ladies Home Journal 誌に掲載されたこの論文の根本となる考えは、すでに1906年の A.P.E.R. に発表されており、そこではさらに、Sargent の女性観を伺い知ることができる。「女性は男性ほど強く、忍耐強くなくとも許されるが、より洗練されて優雅でなければ許されない」という考えを、彼は女性の競技スポーツの評価基準にも当てはめ、良い身のこなしや完ぺきな姿勢、克己、洗練された優雅さなどが女性の競技を評価判断する際に考慮されるべきだとして、男性のスポーツと女性のスポーツを区別している。(Sargent²⁷⁾)

Sargent の門下生であった L.H.Gulick も、競技スポーツと男女の関係について同様な見解を示していた： 初期人類の狩猟や戦いの能力を受け継いだ男は、この能力にすぐれた者だけが生き残るきびしい淘汰の過程を経て、走・投・打に秀でた素質を生み出し、これらの運動を愛好する性質をもつくりだした。競技スポーツはこれらの熟練者が生み出した男の遺産であり、何世代もの間、少年らしさや男らしさを試し、育んできた。「競技スポーツはこのように、少なくともある程度は、男らしさの尺度なのである。」女性の場合は全然話は別である。…彼女らの価値を測る試金石は走・投・打に秀でることではなく、良き母であり、家庭に対して誠実であり、良き働き手であることだった。競技は男らしさをテストするごとくに女らしさをテストするものではない。女らしさの資質は、男らしさの資質が競技での成功に関与するほどには、それに関与しない。…「女性のための競技は現在のところは学校内のスポーツに限られるべきである。つまり、女性のための競技はレクリエーションと楽しみのために用いられるべきである。チームの激しい訓練は肉体と精神を共に傷つけがちであり、公の一般的な競技会は、概して不必要で望ましくない資質を強調するものだ。」(Gulick¹⁴⁾)

競技スポーツと「男らしさ」の関連性を裏付けるこれらの著名な体育家

の考え方は、すでに広く受け入れられ、特に女性体育家によって強く支持されて、女子競技の高度化反対のための理論的根拠となった。

＜女子体育とスポーツ＞

一部の体育家は、スポーツが身体的スタミナと精神力やチームワークを養うために役立つことを早くから論じ、19世紀末からバスケットボールなどのチームゲームを好んで女子体育に取り入れた。チームスポーツは、個人主義より社会関係を重視するという、ジョン・デューイによって提唱された新しい進歩的な教育哲学を満たすものであった。女性は協力の仕方やフェアプレイといった観念に乏しいと考えられていたため、チームゲームはそれを学ぶ最良の方法であると体育家たちは考えたのである。H.I. Ballintineは、1898年、女子大学生の競技スポーツ、特にバスケットボールを奨励してこう述べている： 競技スポーツのもつ最大の価値は、すばやく考え、決然たる動作で瞬時に反応する訓練をプレイヤーに課してくれることである。そしてそれはまた、あらゆるラフプレイを禁止している厳格なルールを守るために自制をはたらかせるよい機会を与えてくれる。またチームにおいては、個人競技よりも個々人の感情を抑えねばならないという点も、バスケットボールの重要な要素である。(Ballintine⁴⁾)

またF.A. Kellorは、アメリカの生活が家庭的、社会的、職業的に多くの機会を女性たちに与えていることを認め、どの分野における成功も競い合いの上に成り立つのであり、競い合いこそは競技スポーツのキーワードであるとして、女性にとっての競技スポーツの価値を認めた。「少女たちは物事を先駆けて行う (initiation) よりも、真似ること (imitation) の方を好むものだが、全てのスポーツは、率先 (initiation) の精神をもたらしてくれるものである。」(Kellor¹⁰⁾) 高校教師のAnna.S. Cressmanも、女性の精神的資質について、「女性は生活のより広くて厳しい責任を負い始めたので、勇気や忍耐、セルフコントロールや自信といった資質——つまり家庭や共同体の経済的生活において意味をもつ資質——を育成することが最も重要である。」と述べ、競技スポーツがそのような資質向上に有用であると指摘している。(Cressman⁸⁾)

こういったスポーツ導入への取り組みは、男性よりはむしろ女性の体育において早くから見られたとされる。男性のスポーツは課外活動としてすでに確立され、アメリカンフットボールや野球など、「アメリカの男らしさ」を象徴するゲームは、その大学対抗競技において勝利に執着するあまり、ルールを無視した粗暴な振舞いや入場料取得による商業化の傾向に走り、プロコーチの雇用や大学の名声のための選手育成など、好ましくない問題を露呈させていた。これに対して女性の競技スポーツは、当初から女子大学や共学の学校の女子体育部門の女性体育家を中心として指導され、男性の競技スポーツが生み出した諸問題を繰り返さないよう、注意深く計画された。(Spears and Swanson³⁰) 多くの女子体育の指導者は、競技スポーツの教育的効用を認めながらも、競技の高度化を伴う大学対抗競技に反対し、女子競技を厳しく統制しようとしたのである。

体育史家である E.Gerber は、この女子競技の統制された発展について詳しく調べた研究者のひとりである。女子競技の統制に関わった組織のそもそもの始まりは、1899年の女子バスケットボールルール委員会の設立であり、これは、あまりにも粗暴な男子用のゲームを女子向きに修正し、高等学校や大学の女子バスケットボールの共通ルールを定めることを目的としていた。この組織は1905年の National Women's Basketball Committee を経て、1917年にはアメリカ体育協会 (APEA : American Physical Education Association) に属する女子競技委員会 (CWA : Committee on Women's Athletics) の下部組織となった。CWAの最初の議長であった Elizabeth Berchenal は、「女子学生のための建設的な競技プログラム、その方針、方法、活動」で、その主張点を以下のようにまとめている：A. 女子学生のための競技はプレイ、健全な楽しみ、健康、そして性格陶冶といった基礎の上にのみ発展すべきである。B. 競技は、一部の者のためではなく、全ての女子学生のためにあるべきである。C. 男子学生たちの競技が犯した全ての過ち（個々のスター選手や一流チームの輩出、過激な競技）や、入場料を払った大衆の見物による興味の喚起、激しい興奮、喝采、新聞の評判、個人的な賞（金）、ごく一部のベストプレイヤーやベストチームの宣伝、プロフェッショナリズム等々を除外する。D. 競技は学内での

み行い（学内競技会、クラス対抗競技会）、学校対抗や大学対抗の競技は行わない。E. 競技大会やゲームでは、個々の女子学生ではなく、チーム同士が競い合う。F. 女子学生にふさわしく、単に男子学生の競技の真似でないと思なされる競技が選ばれ、実践される。G. 女子学生の競技は、有能な女性のインストラクターとリーダーの指導のもとに行われる。（Berchenal⁵⁾）この方針は、のちにCWAのメンバーを中心に構成されたNAAF^{註2)}（National Amateur Athletic Federation）の女子部が1923年の会議で採択した16条の綱領の基本的精神となるものであった。女性体育家を中心とするこのような競技化への批判と女子競技の統制は、APEAの機関誌A.P.E.R.を通じて広く伝達され、国家を通して女子競技を支配する力をもった。（Gerber¹³⁾）具体的には、学校対抗や大学対抗の女子競技は1920年代から1930年代にわたって衰退し、代わってクラス対抗などの学内競技会や、電信競技会・プレイデイ・スポーツデイ^{註3)}といった友好的な学内競技会がポピュラーなものになっていった。（Gerber et al.¹²⁾）またその影響力は、教育機関を越えて女子競技全般に対する管理にまで及び、オリンピックを始めとする全ての女子国際競技会に対する非難となって表れた。そのため、男性と同様に女性によるチャンピオンシップスポーツを組織・制度化しようとしていたアマチュア競技連盟（AAU）や全米陸上競技委員会と組織的な対立を引き起こした。

ハイレベルの競技は「生理機能に悪影響を与え、それゆえ受胎能力にも悪影響を及ぼす。」従って「女性の競技から激しさを取り去ることによって競技の質を落とすことが必要である。」という、著名な男性の体育家Ernst Herman Arnoldに代表される医学的見解や、「男女入り交じった観衆の前で、不謹慎な服装をして」試合をする女子高校生を批判した女性体育家のリーダーのひとりAgnes Waymanの考えは、先に述べたSargentやGulickの女性スポーツ観と同様、女子競技の高度化に反対する重要な根拠になっていた。（Arnold³⁾, Wayman³⁴⁾）激しい競技スポーツは、「肉体的な美しさや優雅さ、社会的魅力や順応性、そして母親となる能力や希望といった、女らしきものの全てを壊してしまうだけ」（Rogers²⁶⁾）であり、未来の母親としての女性の役割や慎み深さといった女らしさのイメー

ジにダメージを与えるものとしてとらえられた。こういった意味では、彼らは女性らしい行動ということについて厳格な規律を内面化している教育者であったといえよう。

「もっと多くの競技を女子に —— しかし正しい種類のものを」(Perrin²⁵) といった呼びかけに代表される女子競技のスローガンは、この時期のある意味で両価値的な女性体育家の態度を表している。彼女らは、ある時にはヴィクトリア的な女性らしさの理想を、またある時にはいわゆるニューウーマンのイメージを引合いに出しながら、巧みに女子体育論を展開した。この点について Park は、当時の女性体育家たちの危機感（独自の主張を持たなければ、得難い教授職の地位を失ってしまうという懸念）が、このようなレトリックを用いさせたのだと指摘している。同じ肉体を持つ女性（体育家）のみが、女子学生にとって何が最良たるのかを知っているのだと彼女らは主張し、「男性支配の競争的な社会の中に保護された避難所としてのキャンパスを囲みこんで」女子競技を統制した。(Park²³ p.21) それはまた、『何を犠牲にしても発展する』というアメリカのスローガンと男性社会に対する反発でもあり (Coops⁷)、その囲いの中で彼女らは、スポーツにおける女性のジェンダーを男性のものとは異なる方向へ結び付けざるを得なかったのである。

<まとめ>

本小論は、19世紀末から20世紀初頭アメリカの主要な体育家たちが、女子体育のあり方をめぐる議論の中で、身体や精神、あるいは運動やスポーツ、教育とジェンダーとをいかに関係づけ、女子体育の動向に影響を与えたのかを A.P.E.R. から検討しようとしたものである。

この時期の体育家たちは、「産むための性」としての役割以外に、市民や労働者としての女性の役割を認識し始め、従来女性のジェンダーと考えられていなかった精神的自主性や社会性の育成を体育の課題に取り入れた。そしてその手段として競技スポーツやゲームを女性に奨励することで、両者のイメージを結び付け、女性の身体性に新たな意味を付与することに貢献した。

しかし一方では、激しく高度な競技スポーツはすでに「アメリカの男らしさの象徴」として認識されており、それらは肉体的、精神的に「女らしさ」の対極に位置するものと多くの体育家が考えていたことも事実である。このような体育家たちの内面化されたジェンダーは、運動やスポーツを見る際の態度となって現れ、女性の競技スポーツを厳格に制限し、ハイレベルな競技を排除しようとする運動となった。この組織の中心となり、女性の競技を「競争」ではなく「共同」的な方向へと導こうとしたのは、女性体育家のグループであった。彼女らのこういった動向は無論、女性の身体的能力に関する否定的見解や女らしさの社会的慣行への追従といった態度のみに基づくものではなく、この時代の新教育の意向やアメリカの男性文化に対する批判とも密接に関わっていた。ともあれ、このような女子競技に対する制限は、女子競技の「今日的」発展から見れば、結果的には「女性が何世代にもわたって苦しんできた隷属状態の延長」(Lucas and Smith¹⁹ p.360) でしかなく、肉体の表現と競技スポーツにおける女性の可能性のある一定の枠内にとどめ、それによって新たに固定された男女の関係を一般社会に還元する機能を果たしたといえよう。

注

- 1) アメリカで最初に組織された体育専門職の協会であるアメリカ体育振興協会 (American Association for the Advancement of Physical Education: AAPE, 1885-1903年) の機関誌。この組織は1903年にアメリカ体育協会 (American Physical Education Association: APEA) に発展し、その後数回の名称変更を行った後、現在のアメリカ保健体育レクリエーションダンス協会 (American Association for Health, Physical Education, Recreation and Dance: AAHPERD, 1980-) となる。
- 2) NAAFは、第一次世界大戦時の青少年の体力水準への反省に基づいた政府の意向を背景に、1921年に組織された。1922年12月に、当時の商務長官夫人であったL.H.Hooverを長として発足した女子部局は、女性が女性スポーツに関与する初めての全国的なアマチュアグループの統括機関となった。
- 3) 電信競技会：競技者は、各々の所属する大学内で決められた条件で競技をし、結果を指定された審判員に電信で報じ、しかるのちに公表するという競技形態。

同一場所に集まるための旅費や手間が省けて何人でも簡単に参加でき、顔を合わせることによって恐ろしい感情がぶつかり合うのを避けることができるといった利点があると考えられた。

プレイデイ：複数の大学から集まった女子学生たちで混成チームをつくり、そのチーム同士で様々なスポーツやレクリエーション的活動を行うもの。

スポーツデイ：プレイデイのシステムを改良したもので、各校の代表チーム間で競技がおこなわれた。参加チームが何のスポーツをするのかあらかじめ知らされていなかったり、勝者やゲームのスコアがその日の内に知らされなかったり、ゲーム自体が緩和されたりして、大学間の対抗競技に発展しないような配慮がなされていた。

引用・参考文献

- 1) Adelman, Melvin L. (1986) A sporting time: New York city and the rise of modern athletics, 1820-70. University of Illinois Press: Urbana and Chicago, p.282.
- 2) Ainsworth, Dorothy S. (1930) The history of physical education in colleges for women. A.S.Barnes and Company: New York.
- 3) Arnold, Ernst Herman (1924) Athletics for women. A.P.E.R. 29 (8) : 452-457.
- 4) Ballintine, Harriet Isabel (1898) Out-of-door sports for college women. A.P.E.R. 3(1) : 38-43.
- 5) Burchenal, Elizabeth (1919) A constructive program of athletics for school girls: Policy, method and activities. A.P.E.R. 24(5) : 272-279.
- 6) Burstyn, Joah N. (1984) Victorian education and the ideal of womanhood. Rutgers University Press: New Jersey, pp.36-37.
- 7) Coops, Helen L. (1926) Sports for women. A.P.E.R. 31(9) : 1086-1089.
- 8) Cressman, Anna S. (1917) A plan of athletics and honors for high school girls. A.P.E.R. 22(7) : 420-426.
- 9) Crosset, Todd (1990) Masculinity, sexuality, and the development of early modern sport. In : Messner, M.A. and Sabo, D.F. (Eds.) Sport, men, and the gender order: Critical feminist perspectives. Human Kinetics Books : Champaign, IL. pp.45-54.
- 10) Downie, Helen (1911) What physical education owes socially, morally and biologically to the girl under fifteen. A.P.E.R. 16(8) : 508-512.
- 11) Drew, Lillian Curtis (1921) Work for the weaker woman. A.P.E.R.

- 26(6): 280-282.
- 12) Gerber Ellen W., Felshin J., Berlin P. and Wyrick W. (1974) *The American woman in sport*. Addison-Wesley Publishing Company : MA. pp.62-68.
 - 13) Gerber Ellen W. (1975) The controlled development of college sport for women, 1923-1936. *Journal of Sport History*. 2(1) : 1-28.
 - 14) Gulick, Luther Halsey (1906) Athletics from the biologic viewpoint: Athletics do not test womanliness. *A.P.E.R.* 11(3) : 157-160.
 - 15) Gulick, Luther Halsey (1909) Physical training for girls at the high school age: The social point of view. *A.P.E.R.* 14(7) : 490-492.
 - 16) Halsey, Elizabeth (1925) The college curriculum in physical education for women. *A.P.E.R.* 30(9) : 490-500.
 - 17) Hartley, Grace (1929) Motivating the physical education program for high school girls. *A.P.E.R.* 34(5) : 284-291, (6) : 344-410, (7) : 405-410.
 - 18) Kellor, Frances A. (1906) Ethical value of sports for women. *A.P.E.R.* 11(3) : 160-171.
 - 19) Lucas, John A. and Smith, Ronald A. (1978) *Saga of American sport*. Lea & Febiger: Philadelphia.
 - 20) モリソン：西川正身翻訳監修 (1976) *アメリカの歴史 2 : 1818-1900年*. 集英社：東京, p.543.
 - 21) 大柴衛 (1982) *アメリカの女子教育：実力派女性のバックグラウンド*. 有斐閣選書：東京, pp.42-56.
 - 22) 小田切毅一 (1982) *アメリカスポーツの文化史*. 不昧堂：東京.
 - 23) Park, Roberta J. (1985) Sport, gender and society in a transatlantic Victorian perspective. *The British Journal of Sports History*. 2(1).
 - 24) Park, Roberta J. (1991) Brains, bodies and exercise in nineteenth century American thought. *Journal of Sport History*. 18(1).
 - 25) Perrin, Ethel (1929) More competitive athletics for girls : But of the right kind. *A.P.E.R.* 34(8): 475-476.
 - 26) Rogers, Frederick Rand (1929) Competition for girls. *A.P.E.R.* 34(3) : 168.
 - 27) Sargent, Dudley Allen (1906) What athletic games, if any, are injurious for women in the form in which they are played by men? *A.P.E.R.* 11(3) : 174-181.

- 28) Sargent, Dudley Allen (1984) Are athletics making girls masculine? A practical answer to a question every girl asks. In : Riess, Steven A. The American sporting experience: A historical anthology of sport in America. Leisure Press : Champaign, IL. pp.255-263.
〈Original work published in 1912.〉
- 29) シアード K.G.・ダニング E.G. (1988) 男性領分の一タイプとしてのラグビークラブ — 若干の社会学的論評. ジョン W. ロイ Jr. ほか編著 : 条野豊編訳 スポーツと文化・社会. ベースボールマガジン社 : 東京, p.237.
- 30) Spears, Betty and Swanson, Richard A. (1983) History of sport and physical activity in the United States, 2nd ed. Wm. C.Brown Company Publishers : Dubuque, Iowa, pp.179-189.
- 31) Twin, Stephanie L. (1985) Women and sport. In : Spivey, Donald (Ed.) Sport in America : New historical perspectives. Greenwood Press: London.
- 32) Tyler, John M. (1907) The girl in the grammar school. A.P.E.R. 12(1) : 18-19.
- 33) Tyler, John M. (1911) The physical education of girls and women. A.P.E.R. 16(8) : 487-491.
- 34) Wayman, Agnes R. (1924) Women's athletics : All uses, no abuses. A.P.E.R. 29(9) : 517-519.
- 35) Whitson, David (1990) Sport in the social construction of masculinity. In: Messner, M.A. and Sabo, D.F. (Eds.) Sport, Men, and the gender order : Critical feminist perspective. Human Kinetics : Champaign, IL. pp.19-29.